僕の昔

夏目漱石

僕の昔

根津の大観音に近く、金田夫人の家や二弦琴の師匠や車宿や、ないし落雲館中学などと、いずれも『吾輩は猫である』の編中で馴染越しの家々の間に、名札もろくに貼ってない古塀の苦沙弥先生の居は、去年の暮れおし詰って西片町へ引越された。君、今度の僕の家は二階があるよと丸善の手代見たように群書堆裡に髭をひねりながら漱石子が話していられると、縁側でゴソ〳〵と音がする。見ていると三毛猫の大きな奴が障子の破れからぬうと首を突き出して、ニャンとこちらを向きながらないた。

あの猫はね、こっちへ引きこしてきてからも、旧の千駄木の家へおりく帰って行くのだ。このあいだも道であいつが小便をたれているところをうまくとっつかまえて連れて戻った。やっぱし旧の家というものは恋しいものかなあ。――なに、僕の故家かね、君、軽蔑しては困るよ。僕はこれでも江戸っ子だよ。しかしだいぶ江戸っ子でも幅の利かない山の手だ、牛込の馬場下で生まれたのだ。

父親は馬場下町の名主で小兵衛といった。別になにも商売はしていなかったのだ。なんでもあの名主なんかいうものは庄屋と同じくゴタくして、収入などもかなりあったものとみえる。ちょうど、今、あの交番――喜久井町を降りてきた処に――の向いに小倉屋という、それ高田馬場の敵討の堀部武庸かね、あの男が、あすこで酒を立飲をしたとかいう桝を持ってる酒屋があるだろう。そこから坂のほうへ二三軒行くと古道具屋がある。そのたしか隣の裏をずっと入ると、玄関構えの朽ち尽した僕の故家があった。もう今はなくなったかもしれぬ。

僕の家は武田信玄の苗裔だぜ。えらいだろう。ところが一つえらくないことがあるんだ。なんでも何代目かの人が、君に裏切りとかをしたということだ。家の紋は井桁の中に菊の紋だ。今あのへんを喜久井町というのは、僕の父親がつけたので、家の紋から、菊井を喜久井とかえたのだそうな。こんなことはそうさなあ、明治のはじめころの話だぜ、名主というものがまだあった時分だろうな。

名主には帯刀御免とそうでないのとの二つがあったが、僕の父親はどっちだったか忘れてしまった。あの

相模屋（さがみや）という大きな質屋と酒屋との間の長屋は、僕の家の長屋で、あの時分に玄関を作れるのは名主にだけは許されていたから、名主一名お玄関様という奇抜な尊称を父親は頂戴（ちょうだい）してさかんに威張（いば）っていたんだろう。

家は明治十四五年ごろまであったのだが、兄哥等（あにきら）が道楽者でさん〴〵につかって、家なんかは人手に渡してしまったのだ。兄哥は四人あった。いちばん上のは当時の大学で化学を研究していたが死んだ。二番目のはずいぶん振（ふる）った道楽ものだった。唐桟（とうざん）の着物なんか着て芸者買（げいしゃかい）やら吉原（よしわら）通いにさん〴〵使ってこれも死んだ。三番目の

が今、無事で牛込にいる。しかし馬場下の家にではない。馬場下の家は他人の所有になってから久しいものだ。

僕はこんなずぼらな、呑気な兄等のなかに育ったのだ。また従兄にも通人がいた。全体にソワくと八笑人から七変人のより合いの宅見たよに、一日芝居の仮声を遣うやつもあれば、素人落語もやるという有様だ。僕はいちばん上の兄に監督せられていた。

いちばん上の兄だって道楽者の素質はじゅうぶんもっていた。僕かね、僕だってうんとあるのさ、けれどもなにぶん貧乏と閑暇がないから、篤行の君子を気取って猫

と首っ引しているのだ。小供の時分には腕白者で喧嘩がすきで、よくアバレ者と叱られた。あの穴八幡の坂をのぼってずっと行くと、源兵衛村の方へ通う分岐道があるだろう。あすこをもっと行くと諏訪の森の近くに越後様という殿様のお邸があった。あのお邸の中に桑木厳翼さんの阿母さんのお里があって鈴木とかいった。その鈴木の家の息子がおりく僕の家へ遊びに来たことがあった。

僕の家の裏には大きな棗の木が五六本もあった。「坊っちゃん」に似ているって。あるいはそうかもしれんよ。

「坊っちゃん」にお清（きよ）という深切（しんせつ）な老婢（ろうひ）が出る。僕の家にも事実はあんな老婢がいて、僕を非常に可愛がってくれた。「坊っちゃん」のなかに、お清から貰（もら）った財布（さいふ）を便所へ落すと、お清がわざ〳〵それを拾ってもってきてくれる条（くだり）があった。僕は下女に金を貰った覚（おぼえ）はないが、財布の一条は実地の話だった。僕の幼友達（おさなともだち）で今、名を知られている人は、山口弘一という人だけだ。この人はたしか学習院の先生かなんかしていられるということだ。くわしくは知らぬ。

そのうちに僕は中学へはいったが、途中でよしてしま

って、予備門へ入る準備のため駿河台にそのころあった成立学舎へはいった。そのころの友人にはだいぶえらくなった奴がある。それから予備門へはいった。山田美妙斎とは同級だったが、格別心易うもしなかった。正岡とはその時分から友人になった。いっしょに俳句もやった。正岡は僕よりももっと変人で、いつも気に入らぬ奴とは一語も話さない。孤峭な面白い男だった。どうした拍子か僕が正岡の気に入ったとみえて、打ち解けて交るようになった。上級では川上眉山、石橋思案、尾崎紅葉などがいた。紅葉はあまり学校のほうはできのよくない男

で、交際も自分とはしなかった。それからしばらくすると紅葉の小説が名高くなりだした。僕はそのころは小説を書こうなんどとは夢にも思っていなかったが、なあに己（おれ）だってあれくらいのものはすぐ書けるよという調子だった。

ちょうど大学の三年の時だったか、今の早稲田大学、昔の東京専門学校へ英語の教師に行って、ミルトンのアレオパジチカというむずかしい本を教えさゝれて、たいへん困ったことがあった。あの早稲田の学生であって、子規（しき）や僕等（らら）の俳友（はいゆう）の藤野古白（ふじのこはく）は姿見橋（すがたみばし）――太田道灌（おおたどうかん）の

山吹(やまぶき)の里の近所の――辺の素人屋(しろうとや)にいた。僕の馬場下の家とは近いものだから、おり〳〵やってきて熱烈な議論をやった。あの男は君も知っているだろう、精神錯乱で自殺してしまったよ。「新俳句(しんはいく)」に僕があの男を追懐して、

思ひ出すは古白と申す春の人

という句を作ったこともあったっけ。――その後早稲田の雇われ教師もやめてしまった。むろん僕が大学学生中(ちゅう)の話だぜ。そのあいだ僕は下宿をしたり、故家(うち)にいたり、あちらこちらに宿をかえていた。僕が大学を出たのは明

治二十六年だ。元来大学の文科出の連中にも時期によってだいぶ変っている。高山（たかやま）が出た時代からぐっと風潮が変ってきた。上田敏（うえだびん）君もこの期に属している。この期にはなかくやり手がたくさんいる。僕等はその以前（まえ）のいわゆる沈滞時代に属するのだ。

学校を出てから、伊予（いよ）の松山の中学の教師にしばらく行った。あの「坊っちゃん」にあるぞなもしの訛（なまり）を使う中学の生徒は、こゝの連中だ。僕は「坊っちゃん」見（み）たよなことはやりはしなかったよ。しかしあの中にかいた温泉なんかはあったし、赤手拭（あかてぬぐい）をさげてあるいたこと

も事実だ。もう一つ困るのは、松山中学にあの小説のなかの山嵐（やまあらし）という綽名（あだな）の教師と、寸分も違わぬのがいるというので、漱石はあの男のことをかいたんだといわれてるのだ。決してそんなつもりじゃないのだから閉口した。

松山から熊本の高等学校の教師に転じて、そこでしばらくいて、後に文部省から英国へ留学を命ぜられて、行って帰って来て、今は大学と一高と明治大学との講師をやっている。なか〳〵忙しいんだよ。

落語（はなし）か。落語はすきで、よく牛込の肴町（さかなまち）の和良店（わらだな）へ

聞きにでかけたもんだ。僕はどちらかといえば小供の時分には講釈がすきで、東京中の講釈の寄席はたいてい聞きに回った。なにぶん兄等が揃って遊び好きだから、しぜんと僕も落語や講釈なんぞが好きになってしまったのだ。落語家で思い出したが、僕の故家からもう少し穴八幡の方へ行くと、右側に松本順という人の邸があった。あの人は僕の小供の時分には時の軍医総監で羽振りが利いてなかく威張ったものだった。円遊やその他の落語家がたくさん出入りしておった。

――ざっと僕の昔を話したらこんなものだ。この僕の

昔のなかには僕の今もだいぶはいっているようだね。まあよいようにやっておいてくれたまえ。

（明治四〇・二・一「趣味」）

日本文学電子図書館

僕の昔

著　者　夏目漱石
制作者　宮澤一郎
底　本　「漱石全集 第 1 巻」 角川書店
昭和42年10月10日 8版発行

日本文学電子図書館